



思い思いの言葉を書いた書き初めの作品が並び、校内には新たな気持ちで2025年のスタートを切った生徒の活気が満ちています。

9日に行われた校長講話では、「残り姿」という言葉から終わりを意識することの意味やその大切さについて考える時間がもたれました。年度末に向け、学校はこれから締めくくりの時を迎えます。それぞれの思いや願いを姿として残せるように、残りの日々も大切に過ごしていきたいと思います。



残り姿を校風や伝統に繋げよう～45日間の過ごし方～（校長先生のお話より）

「一年の計は元旦にあり」とよくいいますが、このことわざは一年間の目標や計画は元旦に決めるのがよい、何事も最初の計画や準備が大切であり、初めの計画ができていないと物事はうまくいかないという意味になります。このことわざには続きがあって、戦国大名の毛利元就が「一年の計は春にあり 一月の計は朔（ついたち）にあり 一日の計は鶏鳴（けいめい）にあり」と長男である、毛利隆元（たかもと）への手紙に書いたものももとになっているそうです。春は年の初め、朔は、月初めのこと、鶏鳴は一番鶏が早く早朝のことになるので、最初の計画が肝心で、しかも早くやった方が良いことを教えてくれます。また、大きな目標を達成するためには、たくさんのスモールステップとその見直しが不可欠、大きな目標を細分化しながら、小さな目標を達成する成功体験を積み重ねることが大切であることを私たちに教えてくれます。

「45」何の数字がわかりますか。今年度の残りの登校日数です。日本語の美しい表現はたくさんありますが、「残り姿」という言葉を知っていますか。残り姿というのは「終わった後の姿、その場からいなくなった後の姿を感じること」です。「その場からいなくなったあとも、心が想像できる気持ちの良い姿」として使われます。

学校では残り姿をいたるところで感じることができます。たとえば、毎日皆さんが帰った後の教室や下駄箱から感じることができます。皆さんが帰った後の教室で、窓が締まり、机や椅子が整頓され、ロッカーがきれいになっている。黒板が掃除されている。今日もしっかりと学校生活を過ごし、そして学習ができていたんだなあと感じることができます。気持ちの良い残り姿です。12月26日のみなさんが休みに入った時の学校の様子です。（写真）

一年の計は春にあり
 一月の計は朔（ついたち）にあり
 一日の計は鶏鳴（けいめい）にあり
 毛利元就

今年度登校日数残りあと

45日

「残り姿」

終わった後の姿、その場からいなくなった後の姿を感じる。心が想像できる気持ちの良い姿。



学校には、日々このような残り姿があるといわれますが、もっと深く大きい残り姿もあります。それは、3月の卒業式や終業式が終わったあとの学校の中です。ここには、深くて大きい残り姿がたくさんあります。3年生がいなくなったそのあとにどんな残り姿を感じるのか、それを考えながら過ごしてほしいと思います。1、2年生が、私たちがなくなったときに何を感じるのか、何を感じてほしいのか、さらに何を通して感じてほしいのか、そんなことを考えながら45日間を過ごしてほしいと思います。

さらに大きい残り姿があります。それは、みなさんが、卒業して10年後、20年後に学校を訪れたときに、多くの残り姿を感じることができると思います。みなさん一人一人の残り姿が、学校の校風となり、伝統となっていきます。校風や伝統は、それぞれの学校で全く違います。その学校に入ると感じる雰囲気が校風です。ちょっとした出来事や行動が、附属松本中の10年後、20年後にどう繋がっていくのか考えてほしいと思います。

どのような残り姿を校内に残すことができるのか。この時期だからこそみなさん一人一人が考え、行動してほしいと思います。そして、1、2年生はそれを感じ取ってほしいと思います。1年生は1年生なりに、2年生は2年生なりに、3年生は3年生の過ごし方があると思います。

みなさんは、この45日間をどのように過ごしたいですか。

- ・3月までにやりたいこと
- ・次の学年に残したい姿
- ・この学校に残したいこと 意見を聞かせてください。

もっと大きな「残り姿」

3年生がいなくなったそのあとに、どんな「残り姿」を感じるのか。または感じてほしいのか。

さらに大きな「残り姿」

皆さんが卒業して10年後、20年後の学校

【1学年生徒】

3年生が卒業していなくなってしまうことを考えて、今のうちに3年生の姿からたくさんのことを学んでおきたい。

【2学年生徒】

今は、1年生から頼られる立場であり、3年生に頼る立場でもあるけど、4月になると完全に頼られる立場になる。3年生に向け、自立の準備期間としてしっかり過ごしたい。

【3学年生徒】

後味のよい、きちんとした姿を残していきたい。やり残しのないように、中学校生活のまとめをきちんとしていきたい。

次のような言葉があります。

「百里を行く者は九十里をもって半ばとす」（もう終わりと思ってもう油断するなということ）

「画竜点睛」（物事を完成するときに、最後に付け加える肝心な部分のこと）

「見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ」（金子みすゞさんの「星とたんぽぽ」）

「われわれが出会ったときの世界よりも、さらに良いものになった世界を残したい」（アップル社のティム・クックCEO（最高経営責任者））

これらも、残り姿に相通ずる思いでしょう。

みなさんもこれから残された日々をどんな締めくくりをするか考えていきましょう。みんなで「残り姿」を感じることができるよう一日一日を過ごしましょう。

残された日々をどんな締めくくり方をするか、どんな終わり方をするかを考えて過ごしていきましょう。そして、卒業式というお別れのときはすぐにやってきます。みんなで姿を感じることができるよう、この3月までを進級に向けての準備期間ととらえ、一日一日を大切に過ごしていきましょう。